

# Open up the future 2024.6.26



## つくる・遊ぶ・ひたる・学ぶ

運動が苦手な子も、楽しく体を動かすことを思う存分味わう姿がたくさん見られた、体育科田中教諭のご授業。研究協議では、遊びにひたって学びになるまでの道筋が議論となりました。探究の在り方として、楽しむことでよいのか、楽しむ中で高まっていくものなのか、意識的に高めることが求められたのか。授業者が体力の高まりとつながる確かさへと向かうことを目標としていることから、「分析はどう位置づくのだろう」「視点を絞ることでより高まりが実感できるかも」といった意見が出る中で、「つくる」関わり方がどうあるとよいのかという議論に及んでいきました。「知識・技能を統合・包括する主要な概念」でつなぐことでカリキュラムを見直し、新領域「友達と運動をつくる時間を楽しもう」の創設に至った体育科部。運動を「つくる」学びの実際が、低学年、中学年、そして高学年へとどのように積み重ねていくのか。真の探究の実際を今後検証していくことで、教科提案がさらに深まっていきそうです。

## 「ここはにているけど、ここは違う！」子供たちの探究の先に

子供たちが人と他の動物の関節の働きと運動の共通性・多様性を見いだす姿が見られた、理科山際教諭のご授業。研究協議では、あえて材（対象）を限定・焦点化しなかったことについての議論では、材を絞らないことにより子供の「したい」自己探究が進み、精選された資料（動画や透明骨格標本の画像）を繰り返し観察することで、関節の位置や曲がる向きについての多くの気づきを記録する姿が見られました。さらなる探究に向けて、探究にどっぷり浸らせるためのタイムマネジメントや子供一人ひとりの学びをどう取り上げるかという議論に及んでいきました。何度も教室の前にいる金魚を観察し、学んできたことと照らし合わせながら自ら考える姿、馬とキリンの首の骨の数の共通性を話し合う姿など、色分けされたグループをより所としてお互いの意見を伝え合う姿が、問題解決へとつながりました。全体共有がなくても子供たちは問題解決に迫れたのではないかという意見も挙がり、さらなる真の探究への手立



てが話し合われました。本単元は人や他の動物との関節の比較から、生物全体の進化論が見える壮大な単元。子供たちが自然の美しさや偉大さを感じ、尊重して、自然とともに生きていける力を身につけられるよう山際教諭のさらなる挑戦は続く。